

目的：礼法（礼儀作法）は、明治以降の学校教育に正科として採用されている。この教科書の内容が、時代の変遷の中でどのような変化を示しているかを明らかにする。

方法：明治14年礼法が、小学校正科として採用以降、昭和20年までに、出版された礼法教科書78冊のうち41冊を入手、その内容を分析し、教科書の構成の変遷をみた。

結果：教科書の内容構成より、教科書の時期区分として6時期を得た。第1期は、礼法教育が開始された明治14年から翌15年までで、この時期の教科書は、起居様式及び物の受け渡し方という項目だけで構成されている。第2期は、明治16・17年で、この時期の教科書は、起居様式・物の受け渡しに加えて、一部の教科書で、住戸内での例えば洗面・更衣・清掃等の生活習慣や、住戸外での公衆道徳等も盛りこんでいる。第3期（明治18・19年）では、この傾向がさらに強まり、ほとんどの教科書が、起居様式・物の受け渡し・生活習慣・公衆道徳そして儒教的な思想を述べている修身、皇室崇拜と幅広い内容を持つに至っている。第4期は、教科書の検定制が開始する明治20年から32年までで、3期に比べ公衆道徳に関する内容がより具体的に記述されている。また皇室崇拜に関する内容もより細分化する傾向にある。第5期（明治33～36年）は、礼法教科書の完成期とも考えられ、ほとんどの教科書が、起居様式・物の受け渡しそして細分化した生活習慣・公衆道徳・修身・皇室崇拜の項目で構成されている。第6期は、いわゆる固定教科書期（明治37～昭和20年）で、5期の内容が継承される一方、抽象的記述の修身の部分と、物の受け渡しのうち、非日常的に記述されている部分（衣類・燭台等の受け渡し）が除外され、整理されている。